それでも貴方は私を信じてくれますか

神無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それでも貴方は私を信じてくれますか

【Ｎコード】
Ｎ５３３９Ｇ

【作者名】
神無

【あらすじ】
これは、七海がつらい生活をだんだんと幸せな生活に替えていく、感動的なお話になっています。

第1章卒業（前書き）

貴方は私をいつまでも幸せに出来ますか？

第1章卒業

＋第１章＋卒業＋

「七海！朝ご飯よ～！降りてらっしゃい」

「はーい！」

アタシは、まだ眠い目をこすりながら、下へとおりた。

「おはよう！」

下には、お母さんとお父さん、そして姉のさくらが朝ご飯を食べていた。

「もう！７時３０分だよ！学校８時からじゃなかったけぇ～」

姉のさくらが、心配そうに言ってきた。

「えっ！うそ！！もう７時３０分？ヤバっっ！遅れるぅ！！！」

「もう！あんた今日でしょ？卒業式。卒業式そうそうに遅刻なんかしないでよねぇ～！！」

「だって起こしてくれなかったから…」

アタシは、急いでご飯を食べて卒業式に着る服に着替えて、一目散に家を出た。

「行って来ま～す！！」

「はいは～い気を付けて行ってらっしゃいね！」

アタシは、走って学校に向かった。　　どうにか間に合って、教室に入った。

「おはよう！！」

友達の舞に挨拶をして、先生が来るまでおしゃべりをした。

「あははは！！」

しゃべっていた途中に先生が入って来た。

―ガラッッ！
「今から6年生最後の出席確認するぞ～。」
「早瀬友美さん」
「はい」
「藤野祐樹君」
「はい」
「渡瀬舞さん」
「はい」
「石原七海さん」
「はい」
……
全員の出席確認が終わり、先生がこれからの予定を話した。
「え～今から卒業式なんだけど……みんな頑張ってね！！」

そして、卒業式本番になり、アタシ達は、先生の合図で入場した。
みんなが席に付き、鳴っていた音楽も消えた。
授与式のときは、かなり緊張した。授与式も終わりそしてついにアタシの出番が来た。
「次は、卒業生代表の石原七海さんが答辞を読みます。」
アタシは、緊張しながらにもステージに向かった。
「私達３６名が今日、そろって卒業します。……お父さんお母さん、地域の方々、そして最後まで見守っててくださった先生方本当にお世話になりました。中学生になっても、小学校で学んで来たことを生かして勉強や部活動など一生懸命頑張りたいと思います。ほんとうにありがとうございました。」
こうして卒業式の幕を閉じた……。

第1章卒業（後書き）

貴方は、今辛い生活を送っていませんか？辛い思いをさせている人はいませんか？私はこの小説を書いて思いました。「人は誰でも、辛い思いをするんだな」とそれで、耐えきれない人は死を選び自分の命を無駄にしている人がいます。でも私は、そんな考え方は間違っていると思います。だって人は、いつか幸せになるんだから……。

神無より

第2章別れ

＋第2章＋別れ＋

卒業式が終わって、帰ろうとしたアタシに突然舞がアタシの手を引いてこう言った・・・

「アタシね引っ越すことになったの……だから、七海と話すのはこれで最後だと思うの、でもねアタシ七海の家にたまに遊びに来るから・・・」

アタシは舞からの話を聞いてとてもショックだった・・・

「・・・うん、ありがと。アタシ舞といててとても楽しかったよ。たくさんの思い出をありがとね。舞と別れるのは寂しいけど・・・違う中学校でもアタシのこと忘れないでね。」

「うん。分かってるよ。アタシのことも忘れないでよね・・・」

卒業式が終わった夜、私は舞に手紙を書いた。

手紙を書き終えたアタシは悲しさのあまり泣いた，どれくらい泣いただろうか気がつけばもう夜がふけていた。

「アタシ・・・このまま寝ちゃったのか」

アタシは素早く用意をして家を出た。

自転車で舞の家に行った，舞達はちょうど出発する所だった・・・

「舞，待って。」

アタシは車に乗り込もうとする舞を呼び止めた。

「あっっ。七海来てくれたんだありがとう。それと今までありがとう。」

アタシはカバンの中にしまってあった手紙とプレゼントを取り出して舞に渡した。

「舞，アタシも今までホントにありがとね。舞といててほんとに楽しかったよ。それと、これはねアタシのお礼の気持ちだから・・・あとで見て」

「・・・うん。ありがとう。アタシそろそろ行くねバイバイ」

「うん。バイバイ」
アタシは車が見えなくなるまで見送った。
家に帰り、アタシはさっきの見送りのときに我慢していた涙の分まで思いっきり泣いた。

第3章初めての体験

＋第３章＋初めての体験＋

舞が引っ越して早，１ヶ月が経った。

そして、今日アタシは晴ればれ中学生になった。

アタシが行く中学校に着き、アタシはまずクラス表を見た。

「アタシは何組かな……あった。」

アタシは１年３組だった。

アタシは、初めての学校に迷いながらにも教室へ向かった。

席は窓際で一番前だった。みんな、知らない人ばかりでアタシは少し戸惑った。

「早く、新しい友達を作らなきゃっっ」と思ってアタシは気が合いそうな人を探した。

けど、なかなか気の合う人が見つからなくて結局アタシは友達が出来ないまま１日が終わった。

その夜、舞から電話があった。

「ねぇ～中学どうやった？ってか友達出来た？」

「ううんまだ。そういう舞は？出来た？」

「えぇっっ・・・うんまぁけっこう出来たで。七海なら絶対できるよ。頑張って」

「うん。ありがとう。じゃあねばいばい。」

「はい・はーいまたね」

「この日は出来なかったけど・・・また明日作ればいいやんな。」

アタシはそう思いながら眠りについた。

次の日学校に行くと何かが変だった・・・

教室に入るとみんなの視線がアタシの方に向いていた。

そして、机に向かおうとするとみんなはアタシを見るなりほとんどの女子がコショコショ話をしていた。

「あれ？おかしいな？ってかアタシなんかしたかな・・・」

そう思いながら、朝の用意などをした。
そして、アタシの人生はここから変わった・・・
また、次の日に学校に行くとまた、昨日みたいにほとんどの女子がアタシを見るなりコショコショ話をしていた。
そして、5，6人ぐらいの女の子がアタシに話かけてきた。
「石原さんってさぁ～なんか感じ悪いしぃ～なんかウザいんだけど・・・それにぃ～ブリっ仔すぎててキモイ・・・」
アタシは、その言葉がショックで泣きそうになった・・・
その日から、アタシは皆から悪口を言われながらの毎日をおくっていた。
そして、悪口の他にも物を隠されたり、避けられたりもされた・・・
アタシは、この世で初めての≪いじめ≫を体験した・・・

第４章辛い生活（前書き）

これも、小説の続きです。
まだまだ続くので最後まで読んでみてください。

第４章辛い生活

＋第４章＋辛い生活＋

≪いじめ≫を受けて１ヶ月が過ぎた５月のある放課後、アタシは１人で数学の教科書を探していた。

「あれぇアタシの教科書ドコだろう」

どこを探しても教科書は見つからなかった・・・

その時、５・６人ぐらいの女の子たちがアタシを囲ってこう言われた。

「あ～あんたの教科書ならトイレに捨ててあったよ。」

こう言い残して女の子たちはどこかへ行った・・・

アタシは急いでトイレへ向かった。

「バタバタバタ……」

トイレに着いたアタシはびっくりしていて言葉も出なかった・・・

「うそ、なんでアタシの教科書がこんなとこに捨ててあるの」

教科書は右から２番目のトイレに捨てられていた・・・

アタシはびしょびしょに濡れた教科書を拾って少しの間、か細い声で泣いた…

「アタシ…もうこんな辛い生活やだよ…」

１時間ぐらい泣き、少し落ち着いたアタシは誰もいない廊下を歩き、そっと校門から抜けだして家に帰った。

家に帰ると、いつもどおりお母さんが快く出迎えてくれた。

「おかえり。七海，ご飯まだでしょ？今温めるから待ってて……」

アタシは、今さっきのショックが大きすぎてあまり食べ物が喉に通らなかった・・・

「いらない。」と言って一目散に自分の部屋へと向かった。

アタシは何の為に生きてるの？いじめられる為？それともアタシを苦しませる為？

それならアタシ・・・死んだほうがいい・・・

ねぇ，神様ってホントにいるの？いたら助けてよ，アタシを楽にさせてよ，生まれ変わらせてよ・・・
ど～してみんなはアタシのこと信じてくれないの？ど～してみんなはアタシを汚いような眼で見るの？
どうか教えて下さい。
アタシは・・・生きていてもなんの役にも立たない・・・
だから・・・この無残な姿のアタシをかき消して・・・
お願いします・・・・・どうか・・・・
アタシは今あなた達を心の底から恨んでいます。
今度、絶対に生まれ変わってやるんだから……
それまで、陰口を言っても悪くは言いません。

第5章出会い（前書き）

これも小説の続きです。

第5章出会い

＋第5章＋出会い＋

アタシは、とてもショックで3日間何も食べていない，あれから学校にも行かなくなった……

でも、学校に行かないとお母さんに叱られるから学校の制服を着て、学校に行くふりをする。

今日も，お母さんに「行ってきます。」と言って1人で暇つぶしをしていた。

「今日はどこ行こう…公園は飽きたし，まだお店はあいてないし……」

そう思いながらも公園で暇つぶしをすることにした。

歩いて公園に向かおうとした途中にアタシはいい施設を見つけた，それはフリースクールだった……

ーこれがアタシとの出会いだった・・・

「こんなとこに施設なんてあったけ？」

そう思いながらにもフリースクールの中を少しだけ覗いてみた，そこにはアタシみたいな人たちが良い笑顔で友達と仲良く喋っていた。

すると、学園長さんらしき人がアタシに気付きこちらに向かってきた。

アタシはすぐに逃げようとしたが学園長さんらしき人がアタシを呼び止め優しく言ってくれた。

「私は学園長の山本彩子よ。ちょっと中見てみる？」

アタシは迷わず答えた。

「どうもアタシは中学1年の石原七海です。中見てもいいんですか？」

「もちろん」

学園長に案内されながらアタシは中を見学した。

フリースクールの中を見て「この子たちはなんて明るいのだろう…

……」と思った。
そしてアタシは学園長にいじめられていたことなどすべてを告白した。
「そう。七海ちゃんはこんな辛い体験があったんだね・・・お母さん達にはそのこと話したの？」
「いえ，まだ誰にも話してません……でもいつかは言おうって決めてるんです。でも……言う勇気がなくてつい……」
「そりゃ言えないよね。分かるわ七海ちゃんの気持ち……実はねこの子たちも七海ちゃんと同じ体験をしていたの……でも，フリースクールに通って変わったのよ。今じゃ笑顔が絶えないくらい楽し気にしてるの。もしかしたら七海ちゃんもここに来たら人生が変わっちゃうかもよ……」
「そう……かな……」
「うん。絶対変われるわ，七海ちゃんなら。だって笑顔がいいもの，少しここに通ってもいいよ。」
「はい。ありがとうございます。お母さんに相談してみます。」
「はい。でも、1週間ぐらい通ってみてそれから考えてみたら？それからでも遅くないわ。」
「……はい。どうも，お邪魔しました。ではまた明日もよろしくお願いします。」
「はいはい。待ってるわね。」
「さようなら。」

第6章新しい友達（前書き）

小説の続きです。
ぜひぜひ，最後まで見て下さい。そしてたくさん、評価してください。お願いします。

第6章新しい友達

＋第６章＋新しい友達＋

その日からフリースクールに通うことにした。

そして、アタシは桜南と言う人と出会った。

その時，アタシは中学生になって初めての友達が出来た。

毎日，毎日フリースクールに通った。

南に出会うために・・・

アタシは友達とお喋りをしていることがとても楽しくて，いつもと違う幸せそうな表情でいられる。こんな幸せな気持ちになったのは何年ぶりだろう・・・

毎日が楽しくてしょうがない。

とても，楽しかった１日も終わり家に帰った。

早速，お母さんに全部の事を話した。

話が終わりお母さんがアタシに言った。

「七海……お母さんあんたのこと考えてなかった……ごめんね。アンタがこんなことになってたなんて思ってなくて……ホントにごめん……それと七海，フリースクールに通いたいんでしょ？だったら行ってもいいよ。話してくれてありがとう。」

「アタシもごめんね。黙ってて……でね、アタシ……フリースクールに行って変わるね絶対に……」

アタシは号泣しながらいつまでも……抱き合っていた。

そして、アタシは正式にフリースクールに通った。

お母さんと学園に行き、学園長からいろいろ説明を受け，フリースクールに着る制服を渡してくれた。

制服は水色のチェックのミニスカートにブレザーの上着，とても可愛かった。

「うわー制服可愛いー。見てみて。」

「うん。本当にね…七海明日からここの学校で頑張るんで。」

「うん。頑張る。お母さん，ありがとう。」
アタシは明日が楽しみで仕方がない。
「明日楽しみぃー。南，驚くかな？」
そう思いながら眠れない夜を過ごした……
お母さん……ありがとう。
そして……神様，ありがとう。
どうか……このまま一生変わらない人生を送らせて下さい。
お願いします。
アタシ……わがままだけど許して下さい。

第7章再スタート（前書き）

これも続きです。
読んでみてください。

第7章再スタート

＋第7章＋再スタート＋

翌朝，アタシはフリースクールに行く用意をした。

「行ってきまーす。」

「行ってらっしゃい。七海忘れ物ない？」

「うん。」

アタシは歩いてフリースクールに向かった。

途中，アタシは南に出会った・・・

「あっ，七海おはよー。七海、通うことにしたん？アタシめっちゃ嬉しい。ありがとう。これからよろしくね。」

「あっ，南おはよーアタシもここに通えて嬉しい。あと、南に出会えて幸せー。こっちこそありがとう。アタシもよろしくね。一緒に行こ，」

そして、アタシと南は他愛ない会話をしながらフリースクールに向かった。

フリースクールに着いて，学園長に挨拶をし，アタシにとって初めての教室へ向かった。

アタシは，教室の前に立ち深呼吸を一つして教室の戸をあけた。

―ガラガラ

アタシが入ってきたのに気づいた，生徒たちは皆「この子誰？」みたいな顔をしていた。

そして，アタシは恥ずかしながら言った。

「初めまして。アタシは石原七海です。分からないことがたくさんあるけど，どうぞよろしくおねがいします。」

すると、皆は笑顔で答えてくれた。

「石原さんだね。こっちもよろしくねー。」

アタシはみんな優しい人ばかりで安心した。さっきまでの緊張もほぐれた。

アタシの席は南の席の隣だったから嬉しかった。
南と喋っていた時，急に後ろの席にいた女の子がアタシに話しかけた。
「ねぇねぇ，七海って呼んでいい？それからアタシは高木沙知だから（沙知）って呼んで。
それと桜さんも呼び捨てにしてアタシも呼ぶから。」
「はいはーい」
前の子たちにも話しかけられた。
「アタシも七海って呼ぶね。アタシのこと佐知江って呼んで。南ちゃんもね。」
「はーい」
「あっ，アタシの友ダチ紹介するね。」
佐知江は5，6人ぐらいの女の子を連れてきた。
「アタシは美智です。アタシはー愛実でーす。アタシは洋子って呼んで。アタシ綾子ー。アタシは紗弥香だからよろしく。」
アタシは1日で8人もの友達が出来た。
「バイバーイ」
「うん，ばいばーい」
家に帰って早速お母さんに今日の事を話した。
「へぇー良かったやん。どう？ここでやっていけそう？」
「うん。ありがとう。みんなも優しそうやし……」
アタシは，明日南たちとどんな話をしようか考えながら眠りについた・・・
神様，生まれ変わらせてくれてありがとう。今，アタシはこんなにも幸せです。
本当に心からありがとう・・・

第8章感謝

＋第８章＋感謝＋

翌朝、アタシは学校に行く用意を素早くし、急いで家を出た
走って南との待ち合わせ場所に向かった。
着いた時にはもう、南たちも来ていて、待ちくたびれていた。
「ごめん…今日寝坊しちゃって……。」
「うーん。そうだよ。まぁ、全員そろったし……行こ。」
皆は笑いながら学校へ向かった。
教室へ向かうと、先に来ていた人達が「おはよー」とあいさつしてくれた。
アタシ達も、「おはよー」と言い、それぞれ自分の席に向かった。
用意が出来て、アタシ達は集まって先生が来るまでいろんなことを語った。
「ねぇー七海と南ってケータイ持ってる？」
佐知江がアタシと南にそう言ってきた。
「ううん。持ってへん…南は？」
「えっ。アタシも…持ってへんで。欲しいけどお母さんがまだ早いって……」
すると、突然佐知江がこう言ってきた。
「あっ。じゃあさー七海と南がケータイ買ったらメールせぇへん？それまで紗知らーと先にやっとくで……。買ったら言ってね、メアド教えるから…絶対に。」
「うん。分かったーお母さんと相談してみる。」
「あっ。アタシも、もう一度相談しよ。」
「これで決まりやね。」
長い授業も終わって、アタシはさっそうと走って帰り、お母さんにおねだりした。
「なぁーお母さん。アタシそろそろ、ケータイ欲しいねんけど……」

「どしたん？急に？」
「えーとー友達みんなケータイ持っとるらしいねん。っでね、もしアタシがケータイ買ってもらったらみんなでメールしようって約束したんだー。」
「へぇーそうなんかー。七海は？ケータイ欲しい？」
「うん。めっちゃ欲しい。」
「うーん。分かったわ。じゃあ今度の休みの日にケータイ買いに行こ」
「うん。お母さん。ありがとうめっちゃ嬉しい。」
アタシは早速、ケータイを買ってもらうことを佐知江に電話で話した。
「あっ。もしもし、七海でーす。」
「うん。七海、どうしたん？こんな遅くに……」
「ごめんね。こんな夜に……あんなぁーアタシお母さんと相談したで。」
「へっ？何が？」
「えっ？だから、ケータイのこと……」
「そうなん？っでケータイ買ってもらうことになったん？」
「うん。それがさぁあっさりおっけーだった。」
「ふーん。やったやん。これで一緒にメール出来るやん。じゃあもう、寝るね。おやすみ」
「うん。おやすみなさい。」
ガチャ
電話を切り、アタシは明日の用意をして眠りについた。
翌朝，アタシはいつものように急いで用意をし、急いで家を出た。
そして，いつもの待ち合わせ場所についた。
今日はいつもより早く着いたと思っていたけど、やっぱり皆はもう来ていた。
「七海ー今日は早いね。行こー」
「え……うん。ありがとう。行こっかぁー」

アタシ達は、おしゃべりをしながら学校へ向かった。
アタシはときどきこういうのが永遠に続いたらなぁって思う。
「ちょっっ。七海ーはやくはやくぅー。学校遅刻しちゃうってー」
「え……あ…うん。ごめーん，すぐ行く。」
教室に着き、また先生が来るまで他愛ない会話をしながらいつまでも、笑い続けていた……
わたしは、南たちとおしゃべりをしているのがとても幸せです。
神様……お願いです。どうか，南たちと永遠にこうして一緒に笑い続けられるように時間を止めて下さい。そして……今までのあの辛い過去を消して下さい。
それ以外は何もいらないから……

第9章嬉しい知らせ

＋第９章＋嬉しい知らせ＋
土曜日の翌朝，約束通りお母さんとケータイを買いに行った。
色はアタシが好きな色，ローズレッドだ。
「お母さん，ケータイありがとう。」
「うん。いいよ。」
家に帰り，早速、美智たちのメアドや電話番号を入れた。
そして，アタシは南に買ってもらったことを報告する。
―ピーピーピープッッ
「あっ。もしもし？南？」
「あ……うん。七海？」
「そうだよん。七海でーす。」
「なーに？どうしたん？」
「アタシなぁー今日，ケータイ買ってもらっちゃった。」
「あっ。そうなん？実はアタシも今日，買ってもらった。」
「えーうそ？偶然じゃん？明日、みして？」
「うん。おっけぇーメアドも交換しよう。じゃあ，ばいばい。」
「うん。バイバーイ」
アタシは，1日中ずっとケータイをいじっていた……
翌朝，ケータイのアラームで目が覚め，朝食を食べたりして、学校に行く用意をした。
行く用意ができて，アタシは家を出た。
「行ってきまーす」
いつものように南との待ち合わせ場所へ向かった。
「ごめーん。また，遅れた。」
「もー。七海ぃー。でもまぁいーや。行こ」
アタシ達はぺちゃくちゃとおしゃべりをしながら学校に向かった。
あっという間に学校に着き、教室に入るとクラスのみんながアタシ

達に笑顔であいさつをしてくれた。
また，アタシ達は集まって先生が来るまで，おしゃべりをやり続けた……
「ねぇー七海。ケータイ買ったんだって？」
突然，綾子がそうたずねてきた。
「えっ？なんで綾子が知ってんの？」
「今日，南から聞いたんだー。やったやん」
「全員そろったことやし，メールやろっかぁー」
「えっ？先にやっとったんと違うん？」
「それがー。皆で決めたんだけど，やっぱり皆でやらないとつまらないやろ？だから七海たちが買うまで待とっかぁーっていう話になったんやー」
「ふーん。ありがとう。じゃあメアドとか教えるわー」
「はーい。」
「ねぇー七海のケータイと南のケータイ可愛くね？しかも，おんなじ色やし……」
「えっ？あっ。ほんまやん。おんなじぃー」
「やろー？そんだけ仲良いっていうことやん。」
アタシは，ちょっぴり得意げに言った。
「いいなぁー」
「いいっしょー？」
そんなやり取りをしながら長い1日は終わった。
友達と別れて、1人家に帰った……
部屋には誰もいなくて，アタシは冷蔵庫から飲み物を取り，一目散に自分の部屋へと入った。
1人で退屈な日々を過ごしているとき，突然アタシのもとへ1本の電話がきた。
「もしもし……」
その声の主はそう，小学校からの親友であった舞だった。
「ん？七海やけど急にどうしたん？ってか久し振り。」

「うん。久し振り。アタシぃーまた引っ越すんだぁー」
「えっ？うそ。なんで？」
「……んん。アタシぃーいっぱい友達できたよ。って言ってたでしょ？けどね，本当は全然友達おれへんくて……ってかアタシ今不登校やねん。っでーお母さんに言ったんやんかーそれで，お母さんがアタシにいちからやり直そうって言ってくれてお母さんが一生懸命アタシの為にフリースクールとかを調べてくれて……それで，悩んだあげくここに行くことになったの」
「どこ？それ？」
「七海が通ってる中学校の近くだよ？」
「なんで？」
「七海といつでも会えるから。」
「ちょっと待って？そのフリースクールの名前は？」
「えぇっとー志野部学園だっけぇー」
「えっ？マジで？」
それは，今アタシが通ってるフリースクールだった。
舞が，まさかこんな所に来るなんて思いもしなかったからそれには本当に驚いた……
「その学園，今アタシが通ってるとこだよ」
「えっ？マジで？でも……なんで？」
「…うん。実はアタシも辛いことがあって不登校になってた。でもねこの学園と出会って，友達ともいっぱい出会ったし，今はとっても楽しい日々を送ってるよー」
「へぇー。アタシ，七海とまた会えるなんてうれしいーありがとね。また，七海の友達紹介してよね。」
「うん。もちろんだよ。じゃあバイバイ」
「はいはーい」
―ガチャツーツーツー
「そっかぁー舞も頑張ってたんだねぇー」
アタシは1人でブツブツと言っていた。

アタシはまた，舞と会えるんだね。神様ありがとう。
舞，これからはずっとずっと一生一緒にいようね。
そして，笑いが絶えないくらいいっぱいいっぱい語りあおうね。

第１０章再会

＋第１０章＋再会＋

アタシは，舞からの知らせを喜んだ。

アタシはその夜舞の夢を見ながら長い夜を過ごした。

翌朝，アタシはいつもどおり学校に行く用意をし，南たちとの待ち合わせ場所へ向かった……

南たちとおしゃべりをしながら学校に行った。

教室に入って朝の準備をし，みんなで集まっておしゃべりの続きをした。

南たちとおしゃべりを楽しんでいる途中に山本学園長先生が教室に入ってきた。

「みんなぁー，今日からここの学園に来ることになった渡瀬さんを紹介するから，みんなよく聞いてあげて……じゃあ入って渡瀬さん」

―ガラッッ

中に入ってきたのは，そう舞だった……

ここに来るのを知っていたアタシはあまり驚いてなかったけど，クラスの皆はすごく驚いていた。

「はじめまして。今日からここの学園に来ることになった渡瀬舞です。分からないことがたくさんあるけど，よろしくお願いします。」

「みんな，渡瀬さんにいろいろ教えてあげてね。」

「はーい」

クラスのみんなは明るく返事をし，舞に快い笑顔で「よろしく」と口々に言っていた。

アタシは舞に早速話した。

「舞ぃーこれからもよろしくね。元気だった？」

「あっ，うん。元気だったよ。また，七海と出会えて嬉しい。ありがとう」

「いや……お礼を言うのはこっちだし……ありがとう」

長かった授業も終わり，南たちと楽しい休み時間を過ごしていたとき，紗弥香がアタシにたずねてきた。
「ねえー，七海ってばもう渡瀬さんと友達になったの？ねぇーどっちから話しかけたの？」
「ち……違うよ紗弥香ぁー，舞とは小学校からの友達。」
へ……へぇーそうなんか。渡瀬さん，よろしくね。次から（舞）って呼ぶからアタシのことも（紗弥香）って呼んで。」
「うん。分かった。（紗弥香）ね」
紗弥香の他にも南や綾子たちも舞に挨拶をしていた。
その時の舞の顔はとても幸せそうな顔だった。
まるで，小学校時代の頃のように……
こうして舞もアタシたちの仲間に加わった。
「七海，アタシのこと紹介してくれてありがとう。」
「いいよ。アタシも舞のこと紹介するつもりでいたから。」
「あっ，七海ってケータイ持ってる？」
「うん。持ってるけど……」
「良かったー。アタシも持ってるんやけど今度メアドの交換せぇへん？って思って……」
「メアドの交換なら今からでも……」
「あー。ごめん今日，持ってきてへんのよ」
「そっかぁーじゃあまた交換しようで」
「うん。バイバーイ」
アタシは本当にうれしかった。
舞がここに来てくれたこと……久しぶりに笑顔を見せてくれたこと……
何もかもが嬉しかった。
―ただいま
家に帰ると姉のさくらが珍しく家にいた。
「おかえり。学校楽しかった？」
「うん……けどさぁーお姉ちゃん仕事は？」

「うーん，サボった」
「はぁ？なんで？」
「めんどいから」
「ふーん」
アタシはこのくらいしか言うことがなかった……
「あっ，お姉ちゃん彼氏と上手くやってんの？」
「は？うん。まぁねー今日はお泊りデートなんだぁー」
お姉ちゃんは最近松浦功太という人と付き合い始めた。
一度会ったことがあるけどあまり顔は覚えてない……
「お姉ちゃん，彼氏と仲良くしないとダメだかんね」
「そんなの分かってるってぇーじゃあ，行ってきまーす」
「はーい。ばいばーい」
アタシはいつもお姉ちゃんをみてうらやましく思う。
だって……お姉ちゃんには彼氏がいるから……
アタシもいつか……欲しい……
―アタシにも彼氏ができるなんて思いもしなかった……

第１１章悩みごと

＋第１１章＋悩みごと＋
お姉ちゃんを玄関まで見送った後，ケータイが鳴っていることに気づき急いで，ポケットからケータイを取り出し，開いた。
着信１件　メール３件
アタシはまず，着信の方を見た。
「今から駅前のマックに来て。」
それは，洋子からの着信だった。
≪おっけぇー≫
アタシはメールで適当に返事をしておいた。
次に，メールの方を見た。
１件目のメールはお母さんからだった。
次の２件は紗知からだった。
「ねぇーいまさっき，洋子からメールきたやろ？話って何やと思う？マックまで一緒に行こ。」
≪おっけぇー行こ≫
紗知にも適当に返事をして，ケータイと財布を持って家を出た。
紗知と待ち合わせて，２人でマックへ向かった。
マックに着き，ドアを開けた。
洋子はすぐに見つかり，洋子がいる席へと足早で行った。
「もぉー２人ともおそいよぉー」
「ごめん，ごめん。話ってなに？」
「……うん。あのね，アタシ……好きな人がいるんだけどーどう思う？」
「えっ？誰？その人……」
「え……と鈴木裕太郎っていう人やねんけど……」
「ふーんってその人同じクラスの子じゃん」
「う……うん。そうなんやけど」

「じゃあ1回告ってみれば？」
「えー，無理だよう……」
「恥ずかしがらずに……頑張れ。アタシら応援するからさっっ」
「あ……ありがとう。」
「だってアタシら友達じゃん？」
「う……うん」
こうして，洋子の恋バナ会議が終わった……
洋子，頑張れーアタシたちはずっと洋子の応援するから……
だから，あきらめずにアタシ達を信じて頑張って……
神様……お願いです。
どうか，洋子と鈴木君が永遠の愛で結ばれるようにしてあげて下さい……
そして，一生一緒にいられるように愛し続けれますように……
アタシは，ただただ貴方達の幸せを祈っています。

第１２章告白

＋第１２章＋告白＋

学校の授業が終わった放課後，洋子は下駄箱で鈴木君を待ち伏せしていた。

―タンタンタン

「き……来た」

アタシ達は洋子に向って小声で言った。

「洋子ぉー頑張れ。アタシらここでずっと見とくからさ」

「う……うん。」

洋子はすっと鈴木君の前に立ち，緊張しながらにも言った。

「あ……あの……アタシ，ずっとずっと鈴木君のことが好きでした。……アタシと付き合って下さい」

「うん。いいよ」

「えっっ？」

「そんな，あっさりでいいの？」

「おー。ってか俺，もともと佐々木のこと気になってたし……」

「マジ？ありがとう」

こうして，洋子と鈴木君はカップル成立で付き合うことになった。

当然，洋子が一番喜んでいた。

「ヤッタァー七海たち，ありがとね」

「いやぁーいいよ。洋子おめでとう」

「ありがとう」

翌日，洋子はなんだか機嫌が良かった。

「なぁー洋子，今日テンションいいな。どうしたん？」

「えーそう？アタシぃー今度鈴木君とデートするねん」

「えー？いいな。どっちが誘ったん？」

「えぇと昨日メールで鈴木君の方から誘ってきたの」

「へぇーやったやん」

「あぁーアタシ達もそろそろ欲しいな……？彼氏。」
アタシ達はまた，集まって洋子と鈴木君たちの話をしながら先生を待った……
アタシは途中，トイレに行きたくなってみんなから席を外した。
「アタシ，トイレ行ってくるぅー」
「はいはーい。行ってらっしゃい」
教室から1メートルぐらい離れたトイレに駆け込んだ。
用をたして，アタシはみんなのいる教室へ向かおうとした。
途中，隣の教室からちょっとイケメンな人がアタシに話しかけてきた。
「ねぇー石原さんだよねぇー話があるから放課後，屋上に来て？」
「はーい。でも，どーしてですか？」
「まぁいいからいいから」
アタシは再び教室に戻り，南たちがいる席へと急いだ。
「おかえり。七海，遅かったね」
「……うん。ちょっとね……隣の教室にいる人にね放課後屋上に来てって……」
「えー？男の人？女の人？」
「うーん。男の人だよ。」
「あっ，もしかしてー告白とか？」
「えー？それはないよぉー」
「さぁーどうだか」
「まぁー分かんないけど行ってみれば？」
「……うん。分かった。じゃあ先に帰っといてね」
「はーい。」
［話ってなんだろう？］
アタシはそればかり思っていて授業にもあまり頭に入らなかった。
とうとう放課後になってしまった……
「七海ーばいばい」
「うん。バイバーイ」

アタシは半信半疑のまま彼がいる屋上へと向かった。
―ドンドンドン
「ごめんなさい。遅れて……」
「あーいいよ。まぁ隣に座ったら？」
「は……はい」
「突然だけど石原さんって好きな人おる？」
「い……いや，いません……けど」
「じゃあ俺と付き合ってくれないか？」
「えっっ？」
アタシは頭がこんがらがって何を言っているか分からなかった。
「えっ？アタシ……？」
「おう。」
「でも……アタシよりもっと可愛い人がいるのに……なんでアタシなんかを選んだの？」
「そ……それは，石原さんがココに来た時俺はもうすでに石原さんのことを気になっていたんだ」
「それで？」
「それで……気づけばもう俺は石原さんしか見えていなかった……
…他にも女子はたくさんいるのになぁー」
「えっ？マジで？けど……アタシでいいの？」
「うん。」
「ありがとう。アタシを選んでくれて……いいよ，付き合ったげる。
」
「マジ？かよサンキュウな。じゃあメアド交換しよっか」
「……んん。」
こうして，洋子&鈴木君カップルに続き，アタシ達も付き合うことにした。
アタシ達は仲良く，手をつないで帰った……
「俺，お前ん家まで送るよ」
「いいよ。家そこだし……」

「そっか気を付けて帰るんだぞ」
「うん。ありがとう」
アタシはとてもとても嬉しかった……
だって，初めて彼氏作ったから……

第１３章誘い

＋第１３章＋誘い＋

彼氏が出来たことを舞たちに話すと，予想通りびっくりしていた。

「えー？うそやろ？出来たん？彼氏……」

「いいなぁーってかアタシ七海に先越されちゃったぁー」

皆は口々にそう言っていたけどアタシと同じ彼氏持ちの洋子は褒めてくれた。

「やったやん？七海，おめでとう」

「うん。ありがとう。洋子だけだよそういう風に言ってくれるの……同じ彼氏持ち同士頑張ろうで」

「うん。がんばろう」

「あっ，ところでさぁー洋子と七海はカレカノ同士なんて呼びあってんの？」

突然，綾子が興味ぶかそうにたずねてきた。

「アタシはぁー裕太郎だから≪裕君≫って呼んでるよ。でも裕君はアタシのこと普通に（洋子）って呼び捨てにしてるんだぁー」

「アタシはね，≪隆太≫って呼び捨てにしてるよ。隆太もアタシのこと呼び捨てにしてるんだぁー」

「ふーん，そうなんや」

「うん」

「いいなぁーアタシも早く作らなきゃ」

アタシ達が彼氏について盛り上がってる途中，突然アタシのケータイが震えだした。

すぐにケータイを開いた。

「誰から？彼氏から？」

アタシは首を縦に振ってメールを見た。

―七海，今日も一緒に帰ろーぜ。

あと今度の土曜暇？暇だったらメールちょうだい。

隆太

「うわぁー七海めっちゃいい感じじゃん？」

「ありがと。でも，人のプライバシーを勝手に見ないでー」

「はいはい。（プライバシーかぁー）」

アタシは隆太のメールを読み終わり，素早く返事をした。

―隆太ぁー土曜おっけぇーだよ。

でも，土曜どこ行くん？教えて？じゃあね……

七海

１０分後隆太から返事が届いた。

―今度の土曜は遊園地に行きまーす。

お楽しみにーでは……

隆太

それは，アタシにとって初めてのデートの誘いだった……

「七海，良かったやん？誘ってくれて……」

「ありがとう……でもめっちゃ緊張するー」

「七海リラックスリラックス……」

「う……うん。」

初デート前日の日，アタシは全然眠れなかった……緊張していたのだ

「嫌われないかな？明日の服何着て行こう……？」とかいろいろ考え過ぎて眠れなかった。

神様には本当に感謝しています。

ありがとう……

第１４章初デート

＋第１４章＋初デート＋

初デート当日，アタシはこの日の為にしまっておいた服をクローゼットから出した。

「はぁー今日かぁ楽しみやなぁー」

そう思いながら，服を着た。

服は，タンクトップにパーカーをはおり，ショートパンツをはいた。

下に降りて，お母さんとお姉ちゃんが朝ごはんの用意をしてくれていた。

付き合っていることはお母さんとお姉ちゃんは知っている。

「七海，早くご飯食べないと遅刻するよ。待ち合わせ，９時でしょ？」

お母さんが心配そうに言った。

「あっ，ヤバい」

アタシは化粧などちゃんとして家を出た。

「行ってきまーす」

「はーい。彼氏と仲良くするんだよー」

待ち合わせ場所についた。

まだ，来ていなかったようで少しホットした。

待ってから１５分，背後からアタシの名前を呼んでいたように思えたのでアタシはすっと後ろに振り向いた。

すると，後ろにはアタシの愛おしい人隆太が息を切らして立っていた。

「……ハァハァ……七海待った？ごめん」

「ううん。全然待ってない，行こ」

アタシ達は手をつないで待ち合わせ場所から離れ，目的の遊園地へ向かった。

遊園地に着きお金を払い，入園ゲートに入った。

まず，最初に乗ったのはジェットコースターだった
アタシ達は，並んでいた時もずっと手をつないでいた……
ジェットコースターに乗り，ジリリという出発の合図とともにジェットコースターは動いた。
ガタンガタンという鈍い音を立てながら上っていた。
やっと上り坂をのぼり終え，今度は一気に坂を下りた。
「キャー，楽しいね隆太ぁー」
「おー，お前手ぇ離すなよー」
「うん」
―ゴゴゴーーー
園内のスタッフさんたちは≪お疲れ様でした≫と言って，バーをあげてくれた。
アタシ達は，乗物から降りて次の人に変わった。
「楽しかったねぇー」
「うん，七海次のとこ行こっかぁー」
今度は，ゴーカートに向かった。
こっちもスゴく並んでいた
アタシ達は長い列の一番後ろに並んだ，
その時も，ずっと手をつないだまま離さなかった……
やっとアタシ達の順番が来た
アタシは赤いゴーカート，隆太は黒いゴーカートに乗った。
アタシはすごく遅めにルートを走った。
さすがの隆太はめちゃくちゃ早かった。
追いつきたくてスピードをちょっと上げてみた，けど隆太は速くて追いつけなかった……
「あーん待ってよー」
長いルートをゴールしたアタシに隆太がいきなり頭をなでた。
「お前，遅いぞぉーは……早く次のアトラクションに乗ろーぜ」
「ぅ……うん」
やっぱり隆太は笑っている顔もサイコーだ

泣いているとこも……怒っているとこも……全部好き
他にもたくさん乗った，もちろん手をつないだまま……
お腹もすいてきて，アタシ達は近くのレストランに向かった
アタシ達は店員さんに指定された場所に着いた。
そして，店員さんがメニュー表と水を渡してくれた。
「んーどれにする？」
「んー俺，ハンバーグにするよ」
「早いね，決めるの……アタシどれにしよう？」
たくさん迷ったあげく，クリームパスタにした
早速，店員さんを呼んで注文をする。
5分後，アタシ達が注文した食べ物が運ばれてきた
「ごゆっくりどうぞ」
店員さんがそう言って再び厨房に戻っていった
「あー，七海の美味そう一口ちょーだい」
「もー，じゃあ隆太のも一口ちょーだい」
「いいよ，」
アタシが選んだパスタも隆太が選んだハンバーグも美味しかった。
お腹もいっぱいになってきてアタシ達はレストランを後にして，次々とアトラクションを乗りつくし，満喫した。
そして，夕方にもなりつつあったので最後に観覧車に乗って帰ることにした
観覧車からの眺めはいたるところにライトアップされていてサイコーだった。
「うわぁーきれいー隆太，ありがとね」
アタシがそう言いながら外を眺めていると，急に隆太にキスをされた
「え……ちょっっ」
「七海，俺こそありがとな付き合ってくれて……これからはずっと一緒にいような……」
「うん。ありがとう」
初めてのファーストキスは深くほろ苦い甘さだった……

第１５章約束

＋第１５章＋約束＋

初めてのキスをしてからアタシは，いろいろ変わった気がした

化粧もするようになったし，髪の色は黒ではなく明るい金髪に変え，

あまり好きではなかった香水も付けるようになった。

「行ってきまーす」

「はいはーい。でも……七海めっちゃ変わったやん大丈夫？」

「うん。大丈夫，行ってきまーす」

アタシは，歩いて学校に向かった…

学校に着き，３－Ｂの教室に向かった

―ガラッッ

「みんな，おはよー」

クラスの人たちはアタシのカッコをみてア然としていた。

「七海，おは……よう」

舞たちもアタシに気づき，ア然としていた。

「えっっ？七海どうしたん？その格好……」

「んん？あっ，これ？ちょっとねーイメチェンしてみたのどう？」

「うん。七海めっちゃ可愛くなってるよーねぇみんなぁ？」

「うん。うん。初めはびっくりしたけど……めっちゃ可愛いよ七海ちゃん」

「えっ？ありがとうアタシ，イメチェンしてみてよかった。みんな，ありがとう」

「えーいいじゃん，ってかアタシら何もしてへんし……」

「そっかぁー，でもありがとう」

「あはははは……」

アタシ達はいつまでも笑い続けていた……

アタシは隣の教室に行った，隆太に見せる為に……

「隆ー太」

隆太はアタシに気づき，上下に手を振っていた。
「おー，七海めっちゃ似合ってるで」
「うん。ちょっとイメチェンしてみたぁー，ありがとう」
「俺，今七海呼ぼうとしてた。あんなぁー今日，屋上にきてくれない？」
「うん。オッケーだよ，でもなんで？」
「いいから」
そして，あっという間に放課後が来てしまった。
アタシは，半信半疑のまま屋上に向かった。
屋上に着き，深呼吸をひとつしてドアに手をかけた。
―ガチャ
隆太は1人座って待っていた。
「隆太ぁーごめん。おくれちゃった」
「おう。まぁ座れって」
アタシが腰をおろしたとたん，急に隆太に抱きしめられた
「へ？なに？」
「七海，俺たちがココ卒業したら一緒に結婚してほしい，約束してくれるか？」
その時，初めてのプロポーズで目に涙がたまっていた。
「それって百人力だよ，ありがとう。アタシ隆太と結婚したい。絶対約束する」
「ホンマに？じゃあ指切りしよ」
「うん。しよー」
アタシ達は小指と小指をからませた
「ゆびきりげんまんうそついたら……」
「はい。じゃあ絶対ね」
「おう。お前もな」
アタシ達は，結婚しようと約束を交わした……

最終章現在・過去・そして未来へ

＋最終章＋現在・過去・そして未来へ＋
あの約束から5年，アタシ達は卒業し，成人になった。
そして，今日アタシ達は約束通り結婚式を挙げた
アタシの友達や両親，そして隆太の親友、両親など他にもたくさんの人たちが式場にきてくれていた。
みんな，涙する人もいればくすくすと笑う人もいた。
式では，指輪の交換をしたり誓いあったりして，楽しいことがたくさんあった。
特に隆太がずっと隣にいてくれたことが楽しかった。
隆太との結婚式も終わり，2人きりでワインを飲んで一緒に話した……

「結婚式終わっちゃったねぇ……ねぇ隆太ーいろんな過去があったねぇー覚えてる？」
「あー，お前と出会ったのも覚えてるで」
「アタシ達，本当にいろんな事があったよねー」
「うん。2人で初めてデートしたときめっちゃ楽しかったなぁー」
「うんうん。でもあれはね，隆太がいたからこそ楽しめたんだよ。」
「んん……俺らずっと仲良く暮らそー」
「うん。仲の良い夫婦にしよーね」
「隆ー太，大好きだよ」
「俺もだよ，七海めっちゃ愛してる」
アタシ達はじっと見つめあい，深くキスをした。
今度のキスはちょっと大人な甘さだった……
式を挙げてから一年アタシ達は変わらぬ日々を送っている。
けど変わったのは1つ，子供が産まれたのだ
名前は百の合と書いて（ゆり）
隆太も，夢に向かって頑張っている。

夢は仲の良い家族にすることだそうだ
「隆太，忘れ物ない？」
「うん。ない……あっ，ハンカチ……ハンカチは？」
「はい。ハンカチ」
「おう。サンキューじゃあ行って来るわー。百合も行ってくるでな」
「行ってらっしゃい」
アタシはそう言いながら隆太を見送った。
「あっ，そうだ。洗濯物干したり，掃除機かけたりしなきゃ」
―ガチャガチャ……
アタシには辛い過去がたくさんあった。
でも，あの人と出会ってから変わったんだ……
今思えばあれは，神様からくれた贈り物だったのかもしれない
あの人と出会って毎日が楽しくてしょうがなくなる。
とても楽しい1日になる
これから，アタシ達は未来へ向かって1歩ずつ1歩ずつ進んで歩んで行きます……

あとがき

＋あとがき＋

この度は神無の小説（それでも貴方は私を信じてくれますか）を最後まで読んでくださり誠にありがとうございました。
私がこの小説を書いた訳はこの小説を読んで、幸せを見つけて欲しいからです。
この頃、テレビや新聞などで≪いじめ≫という言葉を目にします。
私は、それを見ていじめられている人はどういう気持ちでいるのか、逆にいじめている人はどういう気持でいじめているのかと思います。
いじめはいつ起こるのか分かりません。
もしかしたら、あなたの身に起こるのかもしれません
でも、（自分は悪くない）と思って下さい。
貴方は悪くありませんから……
絶対に思ってはいけません。
いじめには個人差があります。
無視をしたり避けられたり……
更には物を隠したり……
でもそれはほっとかずに親や先生などに相談してみてもいいかもしれません……
言うのが嫌ならば相談所などに直接申し出てもいいのかしれません。
いじめていなくても見て見ぬふりをするひともたくさんいますが、これも立派ないじめだと私は思います。
いじめには理由なんてありません。
だから、（私が悪い）なんて思ったらいけません。
それで、あなたらしさがいなくなったらなんの解決にもなりませんから……
悪いのはあなた自身じゃなくて≪いじめ≫です。
とにかく私が言いたいのは（信じあえる友達を1人見つけてほしい）

ということです。
1人だけでも見方がいればその人のためにも（頑張ろう）って思えます。
だから、1人で悩まないで（あなただけににずーっと笑っていて欲しいと思っている人がいる）ということを忘れないでください。
≪いじめ≫はみんなの問題です。
私たち、1人1人が心がけていれば≪いじめ≫なんてなくなるはずです。
まずは、自分で変わってみてください。
そして、運命的な人と出会って下さい……
私は、あなたの幸せを願います。
今日も誰かが幸せになりますように……

～神無～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5339g/

それでも貴方は私を信じてくれますか

2010年10月13日20時34分発行